

## Agnes再考

### “angel in the house” と “strong-minded woman”の狭間で Agnes and Nineteenth-Century Ideas of Womanhood

高橋 沙央里  
Saori TAKAHASHI

ヴィクトリア朝小説に登場するヒロインの理想像として “angel in the house” という女性像が存在する。これは、Coventry Patmoreの詩に由来する女性像であり、従順で、自己犠牲的で、献身的な女性像である。Charles Dickensの作品のヒロインはしばしばこの “angel in the house” を体現していると言われ、とりわけ *David Copperfield* (1850) の Agnes はその典型的な例とされる。

しかしながら、最近のヴィクトリア朝時代の女性観に関する研究は、“angel in the house” という理想像が当時の女性観において唯一の支配的理想像であったという一般的な見方に対して疑問を投げかけた。Rosemary J. Mundhenk, LuAnn McCracken Fletcherはヴィクトリア朝時代の散文のアンソロジーの序文において、当時の社会に対する画一的な見方に次のように反論している。

Victorian men and women from various levels of society and different social backgrounds held and articulated opinions on the important public issues of the day. The volume and variety of that contemplation suggest that latter-day generalizations about the spirit of the age oversimplify the Victorians' complex and many-voiced debates. (xvii)

“the important public issues of the day”にはもちろん女性の問題が含まれている。

ヴィクトリア朝時代に書かれた書評を用いて、当時のヒロインに対する多様な議論を明らかにした Elizabeth K. Helsinger, Robin Lauterbach Sheets, William Veederは女性に関するヴィクトリア朝時代の人々の考えを次のように述べている。

Close study of public opinion between 1837 and 1883 suggests that the traditional model of “a” Victorian attitude — patriarchal domination,

expressed publicly as “woman worship” — is inadequate. The predominant form of Victorian writing about women is not pronouncement but debate. Moreover, the arguments in this debate were both more complex and more fluid than the model of a single dominant cultural myth would indicate.<sup>1</sup> (xi)

Dickensが作品を書いていたヴィクトリア朝中期の50年間に、支配的な女性像というものは存在してはならず、むしろどのような女性が理想であるのかということの議論の真っ最中であったのだ。本稿では当時の議論を参照しながら、Agnesのキャラクターを考えてみたい。

ヴィクトリア朝小説に登場するヒロインを angelic heroine と unorthodox heroine に分類しようとするのは不適切であると Helshingerらは指摘する。Helsingerらは “critical response to literary heroines, both angelic and strong-minded, suggests that in the middle decades of the century the feminine ideal was changing” (81) と述べているが、当時の批評家達の意見は angelic woman を賞賛し、“strong-minded woman” を否定するといった単純なものではなかった。

Helsingerらは “angel in the house”のような女性像の確立を、Patmoreの*The Angel in the House* が出版される約20年前の1830年代後半に書かれたコンダクト・ブックの中に見ている。有名なコンダクト・ブックの一つである Sarah Ellisの*The Women of England*には次のように書かれている。

[I]t is necessary for her to lay aside her natural caprice, her love of self-indulgence, her vanity, her indolence — in short, her very *self* — and assuming a new nature, which nothing less than watchfulness and prayer can enable her constantly to maintain, to spend her mental and moral capabilities in devising means for promoting the happiness of others, while her own derives a remote and secondary existence from theirs.

(15-16)

このようにEllisは女性は自分の幸せのためではなく、男性の幸せのために生きるべきであり、女性がselfを捨てる必要があると述べている。自己犠牲的で献身的で従順な女性が理想的であるという考え方をEllisの本は提示し、domestic angelという理想像を確立した。

しかし、Ellisのコンダクト・ブックに対して1858年の*The Athenaeum*は “*The Women of England* and *The Daughter of England* which were fashionable some years ago” (177) と言及している。Ellisの本は20年後にすでに流行遅れとなっていたのである。20年の間に女性観は変化していた。Helsingerらによれば、1840年代

から1850年代には批評家達の議論は女性の知性に焦点が当てられるようになり、自己否定的、自己犠牲的、献身的なだけの angelic heroine に対して批判的な意見を示すようになっていく。例えば、John Forsterは1848年に*The Examiner*に書いた*Vanity Fair*の書評の中でAmeliaについて “good and sweet but somewhat selfish and insipid”(468)と批判している。DickensのEsther Summersonも同様に批評家に嫌われたヒロインであった。1853年の*The Athenaeum*の書評は “Esther is [. . .] too precociously good, too perfectly self-present, and too helpful to every one around her to carry a sense of reality . . .” (1087)と述べている。このように angelic woman に対する否定的な見解が示されるようになった中で書かれたPatmoreの*The Angel in the House*もまた批判の対象となった。*The North British Review*は1858年に “Mr. Patmore seems to us to take at once an exaggerated view of woman’s natural graces, and a very depreciating view of their capacities for growth” (543)という書評を載せている。

angelic womanに対する批判がなされると同時に、Ellisのコンダクト・ブックに示された自己否定的で、献身的で、男性のために尽くすだけの妻の役割に対して否定的な意見が見られ始める。1854年の*The Edinburgh Review*にN. W. Seniorは男性が妻に求める役割について次のように述べている。

[P]laythings and slaves are not what men look for in wives. They want partners of their cares, counsellors in their perplexities, aids in their enterprises, and companions in their pursuits. To represent a pretty face, an affectionate disposition, and a weak intellect as together constituting the most attractive of women, is a libel on both sexes. (197)

女性の知性に関心が向けられるようになり、男性が妻に求める役割は考えを分かち合うことができる intellectual partnerへと変化した。1830年代に示された angelic womanは1840年代から1850年代にはすでに理想の女性像ではなくなっていたのである。

一方で、「反・家庭の天使」の代表とも言えるJane Eyreに対して批判的な意見が出たのは驚くことではないだろう。Elizabeth Rigby, Lady EastlakeはJane Eyreを次のように非難した。

Jane Eyre, in spite of some grand things about her, is a being totally uncongenial to our feelings from beginning to end. We acknowledge her firmness — we respect her determination — we feel for her struggles; but, for all that, and setting aside higher considerations, the impression she leaves on our mind is that of a decidedly vulgar-minded woman — one whom we should not care for as an acquaintance, whom we should not seek as a friend, whom we should not desire for a relation, and whom we should scrupulously avoid for a governess. (177)

だが、Jane Eyreを肯定的に受け止めた批評家がいたことも事実である。Charlotte Brontëの擁護者であったGeorge Henry Lewesの好意的な書評は当然のこととしても、<sup>2</sup>その他にも1849年の*The North British Review*の書評をHelsingersらも取り上げている。*The North British Review*の書評はAnn Caldwell Marshの*Emilia Wyndham*に登場するangelic womanであるEmiliaとJaneを比較し、一般的にはEmiliaがより賞賛できるキャラクターであるとしながらも、Jane Eyreの方に魅力を感じると述べる。“Now, Jane, be her faults what they may, is never tedious; her worst enemy cannot say that she wearies him, and this probably is the reason why she comes in for rather more than her fair share of our love and favour” (477). Strong-minded heroineを受け入れ難いものであるとする意見が主流であったが、Jane Eyreに対して魅力的であるという考えを持つ批評家もいたのである。

ここでDickensの女性観の変遷を見てみよう。Dickensは基本的には女性の自己犠牲、自己否定、献身的態度、道徳的な影響力を賞賛し、女性は生来この特質を持ち、どのような境遇においてもこれらの特質を失わないものと考えている。しかしながら、後期の作品にはこの基本的考えが揺らいでいることが感じられる。Marryn Williamsは*Domby and Son* (1846-48)、*Little Dorrit* (1855-57)にも精神的な強さの強調や、angelic womanの現実に対する無力さの認識などに典型的なヒロイン像への関心の弱まりが見られると指摘しているが、<sup>3</sup>決定的にそれまでとは異なるヒロインは*Great Expectations* (1860-61)のヒロインEstellaであろう。男性を憎みながら生きているMiss Havishamに育てられたEstellaは、男性に献身的な態度を示すことなどまったくなく、むしろ自分を愛しているPipを傷つけ、苦しめる。また*Great Expectations*はMiss Havishamの復讐の道具としての存在からEstellaが自己を確立していく物語とも解釈できるが、Estellaが最終的に下す決断はPipと友達にいるというものである。Miss Havishamの死後、自分自身の人生を生き始めたEstellaは結婚を選択しない。そして*Our Mutual Friend* (1864-65)のLizzie Hexamがいる。Lizzieは自分で働いて生活費を稼ぎ、自分の力で生きていく強さを持つヒロインである。またLizzieに惹かれてはいるが階級差を乗り越えられないでいるWrayburnの誘惑的態度を拒否し続ける。LizzieはWrayburnが瀕死の怪我を負うことによって、二人の関係が対等になって初めてWrayburnを受け入れる。*Our Mutual Friend*では社会的制約から開放された対等な人間同士としての結婚が描かれる。こうして見てみると後期の作品においてヒロインは“angel in the house”から“strong-minded woman”へと変化している。

ヴィクトリア朝中期には、女性に対して家事能力や外見的可愛らしさよりも知性を求め、考えを分かち合える妻が必要だとする意見が見られ始めていた。同時

に自己主張や自己確立を求めるヒロインに対しても賛否両論あった時期であった。Dickensが*David Copperfield*を執筆していた時期(1849-1850)は、ヒロイン達に対する多様な議論が展開され始めた時期である。また、Dickens自身の女性観もangelic womanを賞賛する立場から次第に変化していた。Estella、Lizzieといった“angel in the house”とは全く違う女性を描くようになるにはいたらない中間の時期に書かれたと思われる*David Copperfield*のヒロインAgnesを具体的に見ていこう。

*David Copperfield*は主人公Davidが不幸な子供時代から、中流階級の紳士としての人生を確立するまでの物語である。言いかえれば、中流階級の紳士とはどうあるべきかということDavidが示す教養小説であるといえる。作品の中心的なテーマの一つとして理想的な家庭の追求を挙げることができる。Davidは仕事において成功した彼の人生にふさわしい女性と結婚することで中流階級の紳士としての人生を確立する。つまり、Davidの結婚は中流階級の紳士としてのどのような妻とどのような家庭を築くべきかということを示している。このDavidの理想的な家庭の理想的な妻となる女性がAgnes Wickfieldである。

まず初めにAgnesをDavidの最初の妻Doraと比較し、理想の妻としての資質を考えてみる。Davidの二度の結婚をBrenda Ayreが“the book’s central conflict”(13)と呼んでいる様に、二つの対照的な結婚を描くことにより、どちらがDavidにとって正しい選択であったか、理想的な妻、家庭とはどうあるべきかが示される。一度目のDoraとの結婚を若さ故に感情に流された失敗、二度目のAgnesとの結婚こそがその失敗を経て辿り着いた理想の家庭であると作品は示していると解釈できる。中流階級の豊かな家庭に生まれ育ったDoraは“ornamental”な女性で、召使いを上手に扱うことができず、家計をきちんと切り盛りすることができない。結果としてDavidとDoraの家庭はDavidにとっての安息の場とはならず、混乱した状況になる。一方Agnesは父親に“little housekeeper”(223)と紹介されているように子供時代から家庭を取り仕切ることができ、父親に対して常に献身的な態度で接する。また、“There are goodness, peace, and truth, wherever Agnes is”(232)というDavidの賞賛からもわかるが、Agnesは家庭内の秩序を保ち、安らぎを与えることができる。Agnesには“angel in the house”の資質がすべて備わっていると言える。事実、DavidはAgnesを自分の“good Angel”(366)と呼び賞賛する。

しかしながら、この作品において、有能なハウスキーパーとしてのAgnesが理想的な妻とされているわけではない。DoraとAgnesの重要な違いは精神的な強さ

と、知性である。家庭を取り仕切る能力に関しては、Davidは最終的にはDoraに家事を教えることを諦めている。Davidは自分の行為を“I had been unhappy in trying it; I could not endure my own solitary wisdom; I could not reconcile it with her former appeal to me as my child-wife” (697)と感じ、“Better to be naturally Dora than anything else in the world” (696)と認める。“child-wife”としてのDoraを受け入れることを選んだDavidにとって、その後も消えることのない不満はDoraと様々なことに対して考えを話し合うことができないということである。Doraとの生活が幸せであると語った上で、Davidは次のように言う。“[I]t would have been better for me if my wife could have helped me more, and shared the many thoughts in which I had no partner [ . . . ]” (697)。Doraには現実的な問題に取り組む強さや知性が欠けている。一方AgnesはDavidの問題を解決する知性を備えている。実際、DavidはDoraには難しい話ではできないと考えて常にAgnesを相談相手としている。現実的な問題を知性をもって取り組むことができるAgnesは、Davidの保護者である伯母のBetsey Trotwoodが財産を失った時にはDavidに仕事を紹介し、またDoraとの関係に問題が生じたときには具体的な解決法を見つけてくれる。Davidの心を満たしてくれる“goodness, peace, and truth”はAgnesの家庭を取り仕切る能力や献身的な優しさではなく、現実的な問題に対処することができる知性と精神的強さからくるものである。このことからAgnesを“angel in the house”ではなく、intellectual partnerとしての理想的な妻と解釈することができる。

ここで、注目すべきことが一つある。DavidがAgnesに対して自分の愛を伝え、二人の関係が成立しているのは、全64章中の最後の3章だけである。全体的なプロットは最終的なDavidとAgnesの結婚へと向かってはいるが、DavidがAgnesにたいする自分の愛情を明確な形で認識するのは第58章のことであり、さらにその気持ちをAgnesに伝えるのは第62章である。それまではDavidは常にAgnesを自分の“good Angel”として崇拝していた。Agnesを愛していることに気がついたDavidが“It was nothing, now, that I had accustomed myself to think of her, when we were both mere children, as one who was far removed from my wild fancies. I had bestowed my passionate tenderness upon another object” (817)と後悔しているように、DavidはAgnesを愛情の対象からはずしていたのである。つまり、この作品の大部分においてAgnesにDavidとの結婚の可能性は見られないということになる。Doraの死後Davidが外国から戻ってきたときに、Betsey Trotwoodが結婚の機会は幾度もあったがAgnesは結局結婚しなかったのだとDavidに説明していることから、子供の頃からDavidを愛していたAgnesが他の男性と結婚するつもりがないことがわかる。そのDavidに対する気持ちもAgnesは“It has long been mine,

and must remain mine” (861)と述べているように、Agnesは自分の気持ちを打ち明ける気はなかった。これらの事から、Davidとの結婚が決まる直前まで、Agnesの中には結婚しないで生きていくという選択肢も存在していたのではないかと考えることができる。作品の大半において結婚の可能性を持たなかったという事実から、独身女性としてAgnesがどのように生きていくことが可能かを考えることはAgnesのキャラクターを考えるにあたり意味のあることであろう。

独身女性としての人生を考えると、AgnesとDoraには人生における可能性に決定的な違いがある。先にも述べたように、Doraは可愛らしさや子供っぽさという外見の魅力以外に何も自分の人生を支える手段をもたない。つまり、外見的魅力によって男性を惹きつけ結婚する以外に生きていく手段を持っていないのである。Doraは若さに頼った魅力を用いて結婚しなければ、父親の死後に生きていく術がない。一方、Agnesは父親の経済力が弱ったときに、自分がガヴァネスとして働いて生活を支えることを決意している。Agnesの知的な能力と精神的強さはDavidにとっての理想的なパートナーとなる条件を満たすだけでなく、独身女性としてのAgnesの自立を支える要素となる。

自立した女性としてのAgnesの可能性を示唆する登場人物が一人だけいる。Davidの伯母のBetsey Trotwoodである。Betseyは夫と離婚し、自分の財産を所有し、誰に対しても自分の意見を表明することを躊躇しない“strong-minded woman”である。Betseyの信念は“A fine firm fellow, with a will of your own. With resolution. [ . . . ] With determination. With character, Trot. With strength of character that is not to be influenced, except on good reason, by anybody, or by anything” (275) といったものである。Agnesはこの信念を実践しているといえる。Merryn Williamsが男性に逆らうことができない弱い女性としてのDoraやDavidの母親とAgnesを比較して

Agnes [ . . . ] emerges from her sad childhood a stronger person than those who have never think or plan. We understand that she has no ‘feminine’ weakness because she immediately sees Steerforth for what he is, and does not resent Dora. (82)

と解釈しているように、Agnesには自分の意見を持ち、それを述べる強さがある。SteerforthをDavidがいかに賞賛し彼の魅力を見とめるようにAgnesに求めても、Agnesは自分のSteerforthに対する判断を曲げない。また、父親に仕事を続けさせないと判断したのはAgnes自身であり、父親と自分の人生を支える手段としてガヴァネスとして働くということも自分で考えて決めたことである。さらに、先にも述べたように、結果として未婚女性となってしまうかもしれないにもかかわらず、David以外の人とは結婚しない、またDavidに対する気持ちは秘密と

して打ち明けはしないというのも、Agnesが自分の意志で決めたことであり、その決意を貫こうとする強さをAgnesは持つのである。ガヴァネスとして働くAgnesを“If she trains the young girls whom she has about her, to be like herself [ . . . ] Heaven knows, her life will be well employed! Useful and happy, as she said that day! How could she be otherwise than useful and happy!” (837) と言ってBetseyは評価する。結婚しなくてもAgnesの人生が有意義なものになりうるということをBetseyは理解している。

Betseyは“strong-minded woman”への否定的な見解の一番の理由を覆す女性でもある。WilliamsはDickensが社会に進出しようとする女性に対して批判的な理由が、Mrs. Jellybyの場合のように彼女達の家を守る使命の放棄に焦点を当てていると指摘する(84) また、Helsingersは当時の“strong-minded woman”に対する批判が、女性の精神的強さ、自己主張、自己意識が、妻としての役割を果たす障害となるという視点からなされていたと指摘する。<sup>4</sup> だが、BetseyはDavidが“I was the object of her constant solicitude; and my poor mother herself could not have loved me better, or studied more how to make me happy” (538)と述べているように本当の母親にも勝る愛情をDavidに注いでいる。またDavidが最初に彼女の家を訪れたときに、家の中が綺麗に片付けられていることに気がつくように、Betseyは家の中のこともきちんとこなす女性である。Betseyは精神的強さや自立した精神が、家庭を守る役割、母親としての役割と相反するものではないということを示している。ただ、Betseyは既に婚期の女性ではなく、夫のひどい仕打ちが原因とはいえ結婚に失敗しているのに対して、Agnesには“strong-minded woman”でありながら、結婚を達成するヒロインとなることが可能であった。先に述べたように、Agnesには女性らしい特質がすべて備わっているが、知性と精神的強さを併せ持つ。Davidが“strong-minded woman”としてのAgnesを受け入れたならば、Agnesは結婚を達成した“strong-minded woman”として前年に登場したJane Eyreの後を継ぐヒロインになる可能性を秘めている。

しかし、Agnesが“strong-minded woman”として作品中で取り扱われることは一度もない。Steerforthに関してAgnesは確かに自分の意見を述べているが、その言葉がとても控えめなものであることは事実である。そして、Agnesの数々の実際的なアドバイスはDavidの“good angel”という賞賛によって、その的確さが評価されるというよりもむしろ「聖なる力」を働かせているかのように扱われる。また、Agnesはガヴァネスとして自立する道を選んだ事について次のように言っている。“I am certain of success. So many people know me here, and think kindly of me, that I am certain. Don't mistrust me. Our wants are not many. If I rent the dear old house, and keep a school, I shall be useful and happy” (776). このAgnesの言葉には強い自己

主張は見られないし、自立した女性として生きていこうという確固たる信念は表明されていない。あくまでも必要にせまられての決断として扱われている。さらにDoraの死後Davidが三年間外国を旅行している間、Agnesは結婚しないでガヴァネスとして働きつづけているのだが、そのことについてDavidは一言“*She was happy and useful, was prospering as she had hoped*” (815)と触れるだけである。帰国後もDavidの関心はAgnesの結婚の可能性に集中している。Strong-minded heroineとしてのAgnesは、言動を非常に控えめにすること、そしてDavidがAgnesをangelとして賞賛し、Doraの死後にAgnesの結婚に焦点を当てることによって否定されるのである。

さらに、intellectual partnerとしてのAgnesも最終的には描かれない。DavidとAgnesの結婚後が描かれる最後の2章において、AgnesはDavidの幸せな家庭を満たしてくれる理想の妻となっている。Davidは自分の結婚生活を次のように述べる。

I had advanced in fame and fortune, my domestic joy was perfect, I had been married ten happy years. Agnes and I were sitting by the fire, in our house in London, one night in spring, and three of our children were playing in the room [ . . . ] .  
(866)

このDavidによる結婚生活の描写はAgnesの自立の可能性を完全に打ち消し、intellectual partnerとしてのAgnesの存在も示されていない。Davidが“I had advanced in fame and fortune, my domestic joy was perfect” (866)と述べていることから、Agnesとの結婚がDavidの人生に良い影響を及ぼしていることはわかるが、Agnesの知性がどれほど役立っているかはわからない。考えを分かち合える女性を求めAgnesへと辿り着いたDavidは結婚後にAgnesの知性について触れることはないのである。

こうして見てくると、Agnesのキャラクターが非常に曖昧であることがわかる。精神的強さと知性を持ち、自立の可能性を秘めながら、最終的には“angel in the house”として描かれる。そしてこの曖昧さこそが*David Copperfield*が書かれた当時の議論を反映している。Agnesは“angel in the house”を賞賛する声、intellectual partnerを求める声、strong-minded heroineの登場とそれにたいする強い関心といった多様な声が凝縮された女性であると言える。AgnesにはCharlotte Brontëのヒロインと共通する要素も見られ、Dickens自身の後期の作品に登場する“angel in the house”ではないヒロイン達につながっていく要素も見られる。Agnesのキャラクターを“angel in the house”であると単純化せずに、時代的背景とあわせて考察することによってAgnesの新たな側面を見ることができる。

## 注

- <sup>1</sup> Helsingersらは当時の定期刊行物に掲載された書評を用いて、ヴィクトリア朝時代に展開されたヒロインに関する議論を詳細に研究している。彼等は当時のヒロイン達と批評家の意見の多様性に焦点を当て、“angel in the house”を唯一の支配的理想像と捉える従来の考え方を否定している。彼等の*The Woman Question: Society and Literature in Britain and America 1837-1883*はAgnesのキャラクターを考えるにあたり非常に有用である。本稿を執筆するにあたりこの本に負うところは多く、特に本稿のI章は彼等の本を参考にした。
- <sup>2</sup> Lewesは*The Westminster Review* (1853)に “They [Rochester and Jane Eyre] are men and women of deep feeling, clear intellects, vehement tempers, bad manners, ungraceful, yet loveable persons. Their address is brusque, perhaps unpleasant, but, at any rate, individual, direct, free from ‘shams’ and conventions of all kinds. They outrage good taste, yet they fascinate.” (491)という書評を載せている。
- <sup>3</sup> 詳しくはMerryn Williamsの*Women in the English Novel 1800-1900* 第6章を参照。
- <sup>4</sup> “The most significant aspect of the contemporary reception of *Aurora Leigh*, however, is the number of critics who do not find the spectacle of an independent-minded heroine fulfilling the angelic role to be either unnatural or impossible.” (102)

## Works Cited

- Ayre, Brenda. *Dissenting Women in Dickens' Novels: The Subversion of Domestic Ideology*. Westport: Greenwood, 1998.
- “*Bleak House*.” Microfilm. *The Athenaeum* 17 Sept. 1853: 1087.
- Dickens, Charles. *The Personal History of David Copperfield*. 1850. London: Oxford UP, 1952.
- Ellis, Sarah. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. 1838, Uniform Ed.; New York: J and H. G. Langley, 1843.
- Forster, John. “*Vanity Fair*.” Microfilm. *The Examiner* 22 July 1848: 468.
- Hatton, R.K. “*Poems by Coventry Patmore*.” Microfilm. *The North British Review* 28 (1858): 529-545.
- Helsingers, Elizabeth K., Sheets, Robin Lauterbach, and Veeder, William. *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837-1883*. Vol. 3. 1983; Chicago: U of Chicago P, 1989.
- Lorimer, James. “Noteworthy Novels.” Microfilm. *The North British Review* 11 (1849): 475-93.
- Mundhenk, Rosemary J., Fletcher, and LuAnn McCracken. *Victorian Prose: An Anthology*. New York: Columbia UP, 1999.
- Rigby, Eastlake. “*Vanity Fair and Jane Eyre*.” Microfilm. *The Quarterly Review* 84 (1848): 153-85.
- Senior, N.W. “Thackeray’s Works.” Microfilm. *The Edinburgh Review* 99 (1854): 196-243.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.
- “*A Woman’s Thoughts about Women*. By the Author of ‘John Halifax, Gentleman.’” Microfilm. *The Athenaeum* 6 Feb. 1858: 177.